

◆精選論理国語

『鬼滅の刃』に見る、 〈救い〉と〈信頼〉の物語

上柿 崇英

大阪府立大学
人間社会システム科学研究科准教授



PROFILE

【うえがき・たかひで】

1980年、東京都生まれ。信州大学農学部卒、東京農工大学連合農学研究科博士課程修了。茨城大学、鹿児島大学などを経て現職。博士(学術)。専門領域は環境哲学、現代人間学。環境問題や持続可能性などのテーマから出発しつつ、人間や社会に関する根本的な問いについて研究する。著書に『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のための思想的試み(上巻・下巻)』(農林統計出版 2021)、共著に『環境哲学と人間学の架橋』(世織書房 2015) など。

『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴作、集英社)は、大正時代の日本を舞台に、鬼と呼ばれる異形の敵を、鬼殺隊という剣士たちが成敗していく物語である。世間に遅れること数年、筆者は最近になってこの作品をテレビで視聴した。そしてそれが単純な勧善懲悪の物語ではないこと、大人も引き込まれるその不思議な魅力は、この作品に込められたメッセージにあると感じた。ここではそのことについて書いてみたい。

まず作品では、敵である鬼たちがとても魅力的に描かれている。鬼たちもかつては人間であり、さまざまな過去を背負っている。見る者は、そこで鬼たちの「人間らしさ」に触れて共感し、愛着がわくこともあるだろう。だが、この作品の本当の味わいはこの先にあるのである。例えば鬼たちが鬼になった理由、それはときに貧困、病、幼少期の虐待など、抗えない不幸な身の上

だったりする。しかし不幸な素性だけで言えば、それは多くの剣士たちも同じである。つまり作品にとって重要なことは、それぞれの生の不運や悲しみにあつて、なぜある人々は鬼となり、またなぜある人々は鬼にならなかったのか、ということなのである。

例えばある人は、悲運な生い立ちにあつても、自分を見限ることなく、一人の人間として接してくれる誰かとの出会いを通じて剣士となった。だが別の人は、そうした誰かと出会っているにもかかわらず、そのことに気がつかない。なぜ特別であるはずの自分を評価しないのかといて、その人をかえって恨み、傷つけ、鬼となった。またある人は、他人が羨むすべてを手に入れているが、天賦の才覚を持つ弟の存在が許せないばかりに、すべてを捨てて鬼となった。さらに別の人は、自らを救った代えがたい人々の

命を隣人に奪われ、おのれの運命と無力さを憎み、戦うこと以外に意味を見いだせなくなつて鬼となつた。悔恨、悲哀、憎悪、怯懦、傲慢、憤怒、嫉妬、虚栄。鬼たちはいつだつて情念にかき乱されている。可哀想な自分という檻のなかで、いつだつて独りで蹲つている。「あの時」のことを、あるいは等身大のおのれの姿を受け入れられず、いつでも何かを否定していなければならぬのである。

筆者はここに、作品の重要なメッセージがあるように思う。それは生きることの〈救い〉についてである。〈救い〉とは、すべてが満たされて幸福であることを意味しない。それは、たとえ苦しみや悲しみが消えなくとも、ありのままの現実を肯定し、心乱されることなく、前に進んでいくことができる心の状態のことだと言える。つまり鬼たちは、力を得たにもかかわらず、

結局は誰一人として〈救われて〉いないということ、むしろ〈救われて〉いないからこそ、彼らは鬼なのである。もちろん、剣士たちもまた苦しんでいる。闘う相手が違っただけで、限りなく鬼に近い状態の剣士もいる。だが彼らが鬼たちと違うのは、「さまざまな矛盾や葛藤」を抱えながら、それでも何ものかと向き合い、前に進もうとしているところなのである。

ではなぜ、人との出会いこそが、ときに誰かの道を開く鍵になるのだろうか。筆者はここに〈信頼〉という、作品のもうひとつのメッセージがあるように思う。〈信頼〉とは、盲目になつて何かに身を任せることではない。そうではなく、あやふやで、眼で見たり、触つて確かめたりすることができない何かを、それでも信じることだと言える。努力は、実らないかもしれない。信じた人が、裏切るかもしれない。それでも何かを頼りにして、自らの道を進もうとする心があり方、それこそが〈信頼〉なのである。鬼たちが信じているのは、何かを打ち負かすことができる強大な力だけで、結局彼らは何ひとつ〈信頼〉してはいない。だが剣士たちは、自身の生き方が、より良き生のためのものだったと〈信頼〉する。そしていつの日か、その生を引き継いでくれる誰かが現れるだろうことを〈信頼〉する。また剣士たちは、自らを〈信頼〉してくれた誰かの想い、その誰かの願いを〈信

頼〉する。それぞれが与えられた現実のなかで、より良く生きようとして日々戦っていること、それぞれの道を全うしようとした、その人たちの生き方を〈信頼〉する。何かを託し、託されていく、そこにある「繋がり」と「永遠」というものを、彼らは〈信頼〉しているからである。

作品には、こうして〈救い〉と〈信頼〉をめぐるメッセージが散りばめられている。だからこそ、見る者たちは、何かを背負い、打ちのめされようとも、「今の自分にできる精一杯」で生きようとする、そんな人々の力強さを見て勇気づけられる。と同時に、決して〈救われ〉ることなく、そうした生き方しかできなかった人々の悲しみに触れて、心を打たれるのである。私たちは、思い通りにいかない世界を生きているのかもしれない。それでも多くの人たちは、実は得るべきものを得、出会うべきものたちと出会っている。そのことに気がつき、感謝し、それを大切に育てていけるかどうかはその人自身の問題であること、「幸せかどうかを決めるのは自分自身」であるということ、物語は教えてくれるのである。

もつとも、俗に言う「セカイ系」と呼ばれる文化の全盛期に育った筆者だからこそ、このメッセージは特別に刺さるのかもしれない。筆者たちは、型にはまった世間の「正しさ」が壊れていく姿を見て、絶対的なものなどどこにもな

いことを思い知った世代である。残酷な世の現実を生き残ろうとして、「事実」にばかりこだわりの、信じられるのは自分の力だけだと思ひ込んできた世代でもある。人の善意や願いを諦めに満ちた目であしらいながら、誰も傷つかないようにと一人で蹲つて、それでも「ここではないどこか」を密かに夢見ていた世代である。筆者は思った。かなしき鬼たちとは、私たち自身のことでもあつたのだと。作品は、「泣きたくなるような優しい音」で語りかける。あなたが背負った苦しみや悲しみは、消えることはないかもしれない。失つたものは、戻らない。それでも前を向いて、あなたの一部となつた何ものかを感じ、誇り高く、進んで行きなさい、と。

◆令和5年度 新・教科書では……

「精選論理国語」では、筆者の文章『「環境」とは何か』を掲載した。

筆者はこの文章で、「環境」とは常に「何者かにとつての環境」であると指摘する。他の生物における例を挙げながら、「人間にとつての環境」とは何かについて考察したうえで、環境哲学の観点から、現代社会が抱える「持続不可能性」について論じている。

「環境」という概念について、新たな視点を与えてくれる評論である。